

## 留学当時に振り返り

第十六回生 橋本 英樹

(埼玉県見性寺住職)

この度の記念すべき横浜善光寺留学僧育英会本年第三十回目の辞令伝達式、誠におめでとうございます。これまでご案内を毎度いただきながら開山忌並びに辞令伝達式には4〜5回程度しか出席がままならず、日頃の不義理をお許し下さいますようお願い申し上げます。私も帰国して早や十六年の歳月が流れており、繁忙の真只中にはありますが、米国滞在中には当育英会の留学僧の末席に加えていただき、おかげさまで今の生活があると時折感謝しておるところであります。

当時を振り返ってみますと駒澤の大学院後の進路が漠然としていて皆目、目標を見失いかけていた時がありました。そんな時期恩師から一度日本を離れてアメリカの禅センターにでも行くのは将来の貴重な経験になるというお話を伺い、夢のようなことで初めは本気に考えることはありませんでした。それがその後夢は膨らみ、いつしかもうこれしかないという意志決定に

変わっております。

その後、禅仏教を世界に広めた鈴木大拙博士、全米に禅センターを開設し、多くの卓越した弟子を育成した鈴木俊隆老師、前角博雄老師をはじめ、多くの先師が渡米して辛酸を嘗めながら仏法東漸を果たしたことを知るに至りました。英語もろくに出来ない身を恥じつつ当時は将来に夢を抱けず悶々とした日々を悩まされていただけに、逆に曹洞宗学にも却って興味が湧き始めました。そこである程度は曹洞宗学を究めてから渡米してやるぞと思つてからの一年は、勉強にも身が入り、そこそこには自分でも納得のゆく論文を仕上げて日本を去ることができました。

渡米後は、一言で言えば苦戦と紆余曲折の四年間でした。日系寺院、語学学校、禅センター、ホームステイ、大学内の仏教学研究所での生活、どれもとても楽しく、一方ではつらい日々だったようにも感じております。

海外での生活は興味深い事ばかり、と同時にトラブルもまた非常に多かつたと記憶しております。幸、不幸がこれほどまでに交互に流転しすさまじく変化の激しい日々は、常に夢と現実の狭間を往来していました。文化、習慣、宗教の違いはおろか、一番は私の場合やはり語学の壁には最後まで悩まされ続けました。そのためストレスから来る特殊な病に罹患したこともあ

り、大病院に通ったこともありました。当時は片言の英語力で、日系の友人が通訳兼付き添いで同伴してくれたこともあります。思えば随分多くの方々にご迷惑をおかけしてどれほど助けて頂いたことか、思い出すたびに赤面することもあります。結局最後まで各地を転々として縁に導かれるままの道程でしたが、やはり運命だったのかなと思うことはしばしばです。当時の経験は、今、時折考える果てしないテーマ、「人生とは、人間とは」の問いに一定の示唆を与えてくれ続けています。

日本ではごく当たり前と思って見過ごしてしまっていたことでも、外地での不思議な出来事は同時にこの世の不思議さを感じさせてくれます。危険な環境に身を置いて命からがら助かったことも幾たびかありました。「生死は仏の御いのちなり」とは、正法眼蔵生死の巻の一節ですが、まさに我が意を得たりです。確かに人間は生きようと思って生きられるものでもなく死のうと思つて死ねるものでもないと思います。全ては縁の世界、仏の境涯の中にあるのだと思います。

アカデミックな世界に身を投じながら何ら研究業績を残すことができなかつた不肖な私ではありますが、現在は次世代に通用するような新たなお寺のシステムづくり、生活に貧している僧侶の支援・育成などに日々取り組んでおります。おかげさまでその輪は少しずつではありま

すが広がりを見せております。子弟もインターナショナルスクールに行かせて私の及ばなかった世界に進んでくれることを秘かに念じております。

米国滞在中は挫折の連続でした。経済的にも困窮して行き詰る中、無条件で手を差し伸べていただいた今は亡き黒田武志老師にこの場を借りて深く感謝し、合掌をいたします。まだまだ大恩師黒田老師の足下にも及ばない状況ですが、老師の大慈悲心に少しでも報いていく所存であります。最後にはなりませんが、当会の益々の発展を心よりお祈り申し上げます。そしていつの日にかこのご恩に報いることができるよう、更なる精進をしてまいり所存であります。

平成二十九年二月十四日